

華流ドラマを見て思い出した学生時代

7組 山本 哲照

韓流から華流へ

このサイトの前身である「小田高11期通信」の第8号(2011.12.1)発行)で私が「韓流」にハマっていることに触れました。それは10数年を経た現在でも続いています。最近はその「華流」も加わってきました。きっかけはどんな作品だったのかは今でははっきりとは思い出せませんが、いつの間にか「韓流」よりもテレビで視聴する本数は多くなっていました。多い時は一週間に7本くらいの華流ドラマを見ています。ほとんどが時代劇です。現代劇も見たいとは思っていますが放映自体が少ないのであまり見る機会がありません。韓流と違ってドラマの放映時間が短いのが大きな特徴です。韓流ドラマは1話が60分～70分と言うのはザラにありますが、華流ドラマは1話が大体40分～45分くらいです。これは大いに助かります。但し、1本のドラマの話数が長いのがちょっと難点ですが・・・短くても30話か40話、長くなると70話から80話を越えるものもあるようです。

漢詩にちょっと思い出が・・・

それはさておき、韓流ドラマを見ている時にも画面に出てくる漢字表記とその漢字の発音を聞いていて日本語との違いや共通点にいつも興味をそそられていたのですが、最近華流ドラマを見る機会が増えてきて最も感じることは漢字に関することです。私は小学校時代から国語が一番好きな科目でした。長じてからも漢字には人一倍関心を持っています。登場人物の名前や国名、地名などの表記や発音なども関心の的でした。そして李白、杜甫、陶淵明などの名前や彼らの作った漢詩などを目にしているうちにあることを思い出しました。

学生時代、親しい学友同士で漢詩の朗読や吟詠にのめりこんでいた時期がありました。(それほど長い間続いたわけではなく、ほんの一時期ですが)

特に好きだったのが盛唐の詩人「王維」の次の七言絶句でした。

『送元二使安西』 元二の安西に使いを送る

渭城朝雨潤輕塵 いじょう ちょうう けいじん うるお
渭城の朝雨 輕塵を潤し

客舎青青柳色新 かくしゃせいせいりゅうしよくあらた
客舎青青柳色新なり

勸君更盡一杯酒 すす つく
君に勸む更に盡せ一杯の酒

西出陽關無故人 ようかん い
西のかた陽關を出ずれば故人無からん

この詩は西域に使いすることになった友人・元二を「渭城（咸陽）」まで送ってきた王維が送別の時に詠んだものです。以下に現代語訳を記します。

送別の地この渭城で雨が降り、通りの土ぼこりを洗ってくれた
旅館の周囲の青々とした柳は朝の雨に洗われて緑が美しい
さあ、君よもう一杯盃を傾けてくれ
西の果て陽関を出ればもう親しい友はいなくなるのだから

私は学生時代、中国の漢詩を日本語で「書き下し文」として訳したものを朗読するのが好きで、特にこの王維の「七言絶句」は丸暗記していました。

いじょうのちょううけいじんをうるおし
かくしゃせいせいりゅうしょくあらたなり
きみにすすむさらにつくせいっぱいのさけ
にしのかたようかんをいずればこじんなからん

と同好の学友或いは先輩学生と酒を飲んで高歌放吟していました。最後の1行の後半部分を「なからんなからんこじんなからん」と勝手に変えて繰り返し絶叫するのが常でした。

「そこだけを繰り返されてもなあ・・・」と地下の王維も苦笑されておられたことでしょう。

もう一つの漢詩

そうそう丸暗記していた漢詩がもう一つありました。御用とお急ぎでない方はもう少しお付き合いください。それは

しょうねんおいやすくがくなりがたし
いっすんのこういんかろんずべからず
いまださめずちとうしゅんそうのゆめ
かいぜんのごようすでにしゅうせい

です。原典は下記の七言絶句です。はじめの2行は皆さんもよくご存じで、口ずさんだことも度々おありなのではないでしょうか？私は後半の2行の方がよく浮かんできます。

少年易老學難成 少年^{やす}老^い易^く学^{がた}成^り難^し

一寸光陰不可輕 ^{いっすん}一寸^{こういん}の^{かる}光陰^{かろ}輕^んず^べから^ず

未覺池塘春草夢 ^{いま}未^さだ^さ覺^めず^ち池^{とう}塘^{しゅん}春^{そう}草^のの^む夢

階前梧葉已秋聲 ^{かいぜん}階^ご前^{よう}の^す梧^で葉^し已^{ゅう}に^{せい}秋^せ聲

現代語訳は

少年はあっという間に歳をとっていき、学問はなかなか完成しにくい。
だから少しの時間も軽々に過ごしてはならない。
池の堤の春草のなかで見た夢がまだ覚めないうちに、
階段の前の青桐の葉には早くも秋の風が吹いている。

いわゆる「勸学」の誌として最も親しまれているものです。日本では古
来南宋の朱熹の作とされてきましたが、近年の研究では別人のもので
あるという説が有力なようです。しかし、それについては本稿の主旨で
はありませんからこれ以上は触れずにおきます。

この詩は別に酒の席に限らず、私自身の不完全な人間形成を慨嘆する
時の自戒の言葉として終生私から離れることはないでしょう。

以下蛇足

最近すっかりハマってしまった華流ドラマを見ているうちに感じた
ことを思いつくままに書き綴ってみました。結局「漢詩」にまつわるこ
とに紙数を費やしてしまいましたが、内心忸怩たるものがあります。
と言うのはWEB 11に投稿されている諸兄の中でも私が承知してい
る範囲では、今道周雄さんと大野正夫さんは掲載されたものを拝見す
れば「漢詩」あるいは「漢文」に深い造詣を持っておられることが分り
ます。

この稿の冒頭に引用した「小田高11期通信」第8号には今道さんが自
身の文章に漢文からの抜粋が増えていることに触れ、「漢文が短い文章
にも関わらず、豊富な意味を含んでいるから惹かれる」とおっしゃって
います。大野氏に至ってはご自分で「想満州」という七言絶句を詠まれ
るくらい漢詩になじんでおられます。「大野正翔」という雅号まで持つ

ておられるのですから、ホントは中国人じゃないの？とひそかに疑っています。これはまあ冗談ですが、両氏の他にも漢詩や漢文にお詳しい方もおられるやもしれないのに、国語が好きだったからと言って学生時代にほんのちょっと聞きかじった程度の「漢詩」の思い出を書き連ねる「暴挙」に「忸怩たる思い」があることを正直に白状しますから、それらの方々はこの駄文をご覧になっても広い心でお許してください。

恐惶謹言